

岐阜県立多治見病院 消化器内科・内視鏡センター

【住所】岐阜県多治見市前畑町 5丁目161番地 【病院長】原田 明生 先生

【病床数】627床(一般562床、結核13床、精神46床、感染症6床)

【内視鏡検査総数】5,135件(平成23年度)うち、上部内視鏡3,045件、下部内視鏡1,771件、ERCP 319件

【スタッフ】医師10名(指導医2名、認定医3名、常勤医5名)、看護師4名(うち内視鏡技師2名)

【保有機器】上部用スコープ12本、下部用スコープ10本、十二指腸用4本、小腸用2本、気管支用5本、超音波内視鏡用2本



“患者さん目線”で作られた 内視鏡センターで 消化器がんに対するトータルケアを提供

高精度放射線治療棟と緩和ケア病棟を備え 消化器がんに対するトータルケアを提供

東濃地区と呼ばれる岐阜県南部、多治見市の中心に位置する県立多治見病院は、市内を中心に近隣の瑞浪市、恵那市、土岐市、中津川市、可児市まで含む広範にわたる、人口約40万人を医療圏とする地域の中核病院です。平成22年3月には新病棟が開設され、精神科病棟も備えた幅広い診療を行っています。

東濃地区唯一の地域がん診療拠点病院として、特に消化器がんに対する専門的な治療に注力しており、平成22年6月には緩和ケア病棟を開設、さらに来春には高精度放射線治療棟の本格稼働が予定されています。これにより、内科的および外科的な専門治療に高精度な放射線化学療法を併用し、さらに緩和医療までを含めた疾患のトータルケアを提供できる体制が整います。

同院の消化器内科・内視鏡センターは、この消化器がんに対するトータルケアを行う上で中心的な役割を担っています。放射線科医と連携して放射線と内視鏡を組み合わせた効果的な治療を行うほか、緩和ケア病棟でのチーム医療にも消化器内科医が参画しています。消化器内科部長の佐野仁先生は、「近年、我々はより専門的な検査や治療を地域に提供することが求められています。健診やスクリーニング検査は近隣施設が行い、そこで何らかの疾患が疑われる患者さんに対して、当院で精密検査や内視鏡治療、また治療戦略の構築などを行っています」と、患者さんの利益向上のために地域および院内全体で疾患の早期発見と高度専門医療を実践されている現状についてお話いただきました。



消化器内科部長
佐野 仁 先生



内視鏡センター長
奥村 文浩 先生

受付から検査室を出るまでが内視鏡診療 スタッフのアイデアが 随所に活かされたレイアウト

同院の内視鏡センターは、平成23年7月に新しく移転、拡充されました。多様化する近年の内視鏡診療に適応するため、限られたスペースでより質の高い検査や治療を行うことをコンセプトに様々な改善がされています。

3つの検査室は、従来のカーテンで区切られたものから、プライバシーをしっかりと担保するために完全個室化されました。超音波内視鏡、ESD、ラジオ波治療などの多岐にわたる手技を安全かつ効率的に行うため、検査室はそれぞれ広さなどを変えて特徴をもたせ、緊急内視鏡にもすぐ対応できるような配置になっています。また、前処置から検査・治療、リカバリーへとつながる一連の患者さんの流れを、限られたスタッフでも十分に目が届くような導線になるよう、スタッフの意見を取り入れてレイアウトを完成させたそうです。「医師は手技そのものにしか注意が行き届かないところがありますが、患者さんにとっては受付をされてから内視鏡センターを出られるまでが検査もしくは治療になります。その点、看護師をはじめとするスタッフは患者さんの目線に近いところで毎日仕事をしており、患者さんが快適に過ごせるためにはどういった改善が必要なのかを最もよく知っています。現在の内視鏡センターは、スタッフのアイデアが随所に活かされています」(佐野先生)。車イスがそのまま入れる広いトイレや、壁際に机と仕切り板を設けてプライバシーを確保した大腸内視鏡前処置室などは、実際にスタッフのアイデアで生まれています。来春からは内視鏡システムも最新のものに一新される予定で、最先端の技術が診断および治療に活かされていきます。

▶次ページへつづく

岐阜県立多治見病院 消化器内科・内視鏡センター

院内の電子カルテシステムと スコープの洗浄履歴を連動させるため スタッフが独自に専用データベースを開発

同院は平成24年1月6日付けで病院機能評価Ver.6を取得していますが、内視鏡センターでも設計の段階でこのVer.6取得を見据えて様々な取り組みを行いました。前述の患者さんのプライバシー確保の他にも、スタッフの導線と患者さんの導線が完全に交差しないようにしたこと、また内視鏡処置具は可能な限りディスプレイ製品を使用し、スコープの洗浄・消毒の履歴管理を徹底するなど、感染管理に関してもup to dateな取り組みを継続して行っています。特に洗浄履歴については、内視鏡センターのスタッフが専用のデータベースを作成し、院内の電子カルテシステムとリンクさせてリスクマネジメントを徹底しています。佐野先生は、「出来合いのシステムを使わずに、スタッフが当院の電子カルテに対応する独自のシステムを率先して手掛けてくれました。もし何か問題があっても、使用スコープを特定できるので原因追究がしやすいことと、またそのスコープを他にどの症例で使用したのかもすぐに知ることができます。さらに、修理やオーバーホールをしてからどの程度使用したかなどの情報も取れるため、メンテナンスにも一役買っています」とご説明いただきました。

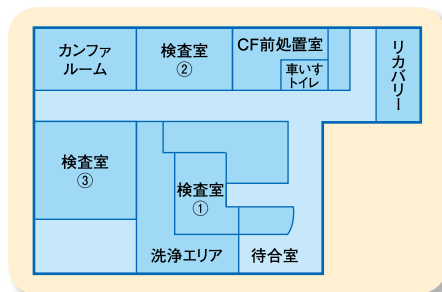
内視鏡センターのスタッフは放射線科と兼任で移動もあります。その中でも内視鏡技師の資格を取得する看護師が多く、仕事にやりがいを感じている積極的なスタッフに恵まれているそうです。「医師と看護師のチームワークの良さは県立多治見病院の内視鏡センターの伝統であり、「患者さんのためになることをする」という目標が一致しているからこそ、お互いに様々な工夫や提案のアイデアが出てくるのだと思います」とおっしゃる佐野先生のお言葉には、一緒に内視鏡診療に取り組んでいるスタッフへの絶大な信頼が伺えました。



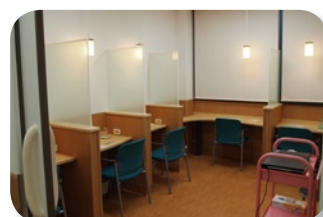
内視鏡センタースタッフのみなさん



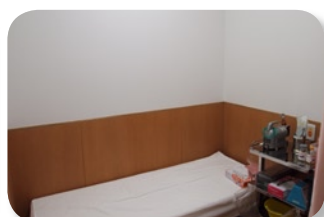
消化器内科・医師のみなさん



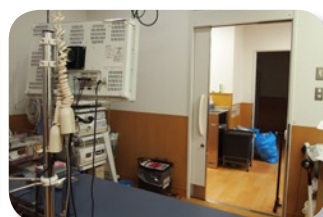
内視鏡センターのレイアウト



限られたスペースでプライバシーに配慮した大腸内視鏡前処置室



ベッドが置かれた個室の前処置室



周りを気にせず過ごせる、完全個室化された検査室



ゆっくりくつろげるリカバリールーム

多岐にわたる幅広い手技に携われるのが魅力 未来の内視鏡診療を支える消化器内科医を輩出

現在、内視鏡センターでは10名の消化器内科医が活躍しています。同院の内視鏡センターは伝統的に優秀な人材を輩出しており、重要な人材教育の拠点としても評価が高いところです。佐野先生は、「院長の理解もあって現状の人数になってはいますが、一人一人に手間をかけて丁寧に人材育成を行いたいという趣旨からすると、現状ではまだ人手が足りません。しかし、過去に当院から大学医局(名古屋市立大学消化器代謝内科)に戻られた先生方が大学でも活躍され、また当院がこの地域で行っている診療の実績や重要性を教授、医局が理解していただいていることが、現場の励みにもなっています」と言われます。内視鏡センターで行っている診療内容は多岐にわたり、診断から治療まで幅広い手技に携われることが研修医にとっては大きな魅力であり、そのため近年では医局外からも後期研修医が志願して来るそうです。

今年10月にはIBD外来も新しく立ち上がり、今後ますます症例が増えることが予想されます。佐野先生は、「内視鏡センターの改装や新しい機器の導入など、環境はほぼ現状望み得るものに整いつつあります。アメニティの向上はスタッフの頑張りが大きかったので、今度は医師の番だと気合を入れているところです」と、笑顔でおっしゃいます。今年から始めた新しい取り組みとして、院内の医療連携室が近隣の先生を直接訪ねて要望を伺い、改善点などを吸い上げる活動を始めたそうですが、佐野先生は其中で内視鏡センターが行っている診療内容がまだ広く認知されていないことを感じられたそうです。「せっかく先進的な医療を提供できるハードとソフトを備えていても、開業医の先生や患者さんがそれを知らなくては、患者さんに病院にいらしていただけません。今後はそれをいかにアピールできるかが課題です」と、今後の展望についてもお話しいただきました。

消化器内科・内視鏡センターのみなさんの患者さんを一番に思う気持ちが、内視鏡センターの隅々まで行きわたる創意工夫を生み出し、そうした一つ一つの取り組みが安全で質の高い医療を可能にする原動力になっていることが伺えました。